

履言見敘早人妻即黃超絕五強超

と実践の伝道

1780141

国宝
西本願寺蔵
安城御影

無量壽經優婆塞願生
偈 染教般豆菩薩曰
世尊我一心歸命盡十方
元身光如來願生安樂國
我修修多羅真寶功德相
既願得總持與佛教相應
觀彼世界相勝過三界道
究竟如虛空廣大无边際
又曰
觀佛本願力過元空過者
能令速滿足功德大寶海

大無量壽經言
設我得佛十方衆生至
心信樂欲生我國乃至十
念若不生者不取正覺
唯降五逆難謗正法
又言
其佛本願 聞名欲往生
皆悉到彼國 自我不退轉
又言
必得超絕去 往生安樂國
橫截五惡趣 惡趣自然閉
昇道無窮極 易往而無人
其國不遠遠 自然之所寧



和朝釋親鸞正信偈曰
本願名號正定業至心信樂願爲國
成等覺終大涅槃必至滅度願以就
如來所以興出世唯託於此願海
五濁惡時難生海應信如來如實言
能發一念善愛心不折煩惱得涅槃
凡聖淨諸惡趣入如來水入海一味
掃取心死常照諸己能離破元明闇
貪愛煩惱之雲常覆真寶信心天
曆如日光覆雲霧雲霧之下明元闇
獲信見敬得大慶即超絕五惡趣
愚亮親齋 八十
三歲



聖人生前の風格を最もよく伝え
虚飾のない真相を追求する偉大な精神

『安城御影』の名は、親鸞の弟子専海が相伝し、三河国碧海郡安城に伝
来したことに由来する。

親鸞聖人の在世中に描かれた肖像で、現存するのはこの安城御影と
鏡御影とである。共に本派本願寺の所蔵で、聖人生前の風格を最もよ
く伝えるものとして著名であるが、またこれ等は鎌倉時代の肖像画の
優品としてすこぶる尊重さるべきである。

安城御影は絹本着色、縦二七・七釐、横四〇・一釐の完成図で、法
眼朝圓の描くところという。墨染の衣に袈裟を着し、上置の上に坐す
る右向きの坐像で、像前には杖・草履・火桶などを配する珍らしい構
図である。聖人八十三歳の画像である。

ところで、安城御影は周囲を三条の墨線をもつてかこみ、画像の上
部に二段、下部に一段の区割を設け、『淨土論』『無量壽經』『正信偈』
の文を銘文として記している。この銘文は、画像を中心として上下に
書いているのは聖人筆の名号本尊等と同じで、宋代の様式に倣ったも
のである。しかもこの画像では、上部に二区を作って記しており、
この種の例は、聖人においても他に存しない。さらに、これ等上下の
銘文三区を合計したスペースは中央の画像のそれと相等しい。これは
画像と銘文との関係乃至聖人の画像における銘文の意味を思わせる
ものがある。

嘗て文和三年（二三五）・聖人滅後九十二年、安城の照空が上京して、
存覺上人にこの御影を伝持していることを物語ったところ、上人が拝
見を希望したので、翌年照空は御影を携えて再び上京。上人はその拝
見の記を、『袖日記』に詳記している。そこにこの御影は「ウソツツカ
セシマス御口也」との註記がある。すなわち口をつぼめて息を強くふ
く形をあらわしている。「嘘の御影」とも称される由来がここにある。

聖人はしばしばこういう口許をされたのであろうか。また「此御影御テ
ツカラ被レ御覽」御鏡ヨクニタリト被レ仰、御シラガノ數マデモ□□違
奉レ寫云々」と聖人が申されたという所伝のあったことをも記している。
これらはどこまでも聖人の真実の姿を描き出そうとする精神が、この画
像を強く支配し、また聖人がいかに何の虚飾もない真相を描くことを求
めたかをよく示すものといえよう。

存覺上人が『袖日記』を著してから百年余を経た寛正二年（一四六二）
十月のころ、蓮如上人はこの御影を修理し、さらにその後二十年を経ず
して文明十二年（一四八〇）、再修覆を加えている。寛正二年は親鸞聖
人の二百回忌に相当するが、第一回の修理はこの年の十月のことである。
元来、蓮如上人は存覺上人の『袖日記』によって、三河安城に安城御影
が伝持されていることを知っていた筈で、現に上人が作ったこの御影の
副本の裏には、『袖日記』の御影拝見記を摘記している。それで三河に
上人の教化が及んだこの機会に、御影に注意し、とり寄せ、修覆を加え
たものか、と思われる。

ところで、その後、御影は三河に返還されたようである。この際この
御影の副本を、上人が作ったものと伝えられる。すなわち願誓の「反故
裏書」に「右の御影、蓮如上人の御代めしのぼせられ、二幅うつさせ給
ひ、一本は山科の貴坊に御安置、一幅は富田教行寺にをかせられ侍り、
正本は願正寺へかへし給ふ」といっている。
正本・副本ともに国宝に指定されているが、正本は薫染剥落が甚しく、
この度複製したのは、右の内上人が山科本願寺に安置された副本による、
原寸原色どりの影印である。